

住居設計論

室伏 次郎 (建築家・神奈川大学教授)

—光・スケール・場所性—

はじめに

住宅を設計するとはどういうことか。本来個人の日常性に基づいた機能的な要請に始る住宅の必要に対して、設計するということが、表現することとは、その本質において無関係なことである。もし住宅を題材にその表現を設計することに意味があるとするなら、それはいかに小さな存在といえども、特殊な場合を除いて、建築として建ち上った瞬間にそれは社会的な存在とならざるを得ない、場所に固定されるという建築の宿命のために、環境に対するその存在の意味と、そのものとしての存在の仕方を問われるということにおいてのみであろう。しかしこれとても、クライアント自身の住宅を必要とする機能的要請と、その充足にとっては無関係といってよい。

にもかかわらず住宅の設計を通じて表現を試みようとする。それは何を指すのか？

住宅の設計の評価は常に上述のような、住宅性と建築性(表現)とのせめぎ合いの中で捉えられてきた。その評価基準にその住宅性の性能機能の充足度が問われてきた。住宅を人間の営みの総合的な歴史的時間の入れものと捉えた時に、その長い時間に耐える、生きられた空間として在るための、場の設計、それをここでは住居——時間に耐える住むための場——の設計と呼ぶとすれば、一方日常性の要請する様々な機能に対応する空間の設計を住宅の設計と呼ぶこととする。そのような場の設計とは、機能を充足しながらそこから自律する空間、機能の変化に対しても自律的に在り続ける場として構想され、それ等の2重写しの関係に生活が在るという、生活と空間の自律的關係の設定ということが出来る。

1. 機能と空間の自律的關係

機能的要請からのものの自律ということとは、同時にものと人の自律的關係を呼び醒ます。生活者にもものから解放された自由な関係を感じさせるものとするものである。それは、住居の在り方とは住宅が生きるための根源的な場であれば、そこに呼び込まれる時代状況、環境変化、住まう人自身の変化に応じて様々に変化を求める機能的な要請があるが、それは解決すべき問題の一つではあっても、効率や利便性を第一義とするのではなく、空間は精神の在り方に関する条件と場を作ることを第一義とする

場、であると考え。かつまた具体的にそれは、空間の純粹性を保証するために、機能=道具、^{しつら}設えを規制する場の作り方ではなく、むしろそれらは互いに自由に併存し、併存することによって互いの存在を許容され、結果それぞれが純粹に見えてくるという関係である。そのような場において人とも、空間と機能は、自律した関係性と、互いの解放された自由を感じるものとなると考える。

2. 壁のもたらすもの——個感覚の覚醒と自由ということ

住居の空間を構成するものとして、私の場合壁というモチーフを多用して作ることを続けているが、自由と表裏一体を成す個の意識について、壁という形式が不可欠と考える。壁は空間の構成上、制約に満ちた都市の住まいを形成することに好都合であるが(構造的でかつ、空間分節の機能を果し、安全、防音等と有効である)そのことを超えて、壁であること自体が、その様相のもたらすものとして、意識を内に向わせるものがある。都市居住に不可欠とも考える個感覚の覚醒を壁そのものが促すと考える。それは全てが水平な連続として展開する自然と一体となる空間を根源とする我が国の文化の在り方に対して、壁の空間のもたらすものは、自然と対立するという概念に基づいた個の文化、彼我の対峙の感覚の基幹となるものであると思うからである。都市——多様な個の自由な存在を許す空間——の生活に個感覚が不可欠とするならば、我々はこの壁の空間がもたらす意味を、生活の内、それと対立する文化の側に在ってなお、理解し、意識化を可能にする能力を要するのではないか。それは優劣の問題ではなく、理解ということであり、同化、吸収とも異なる。そのような意識から、個の自由を表現するモチーフとして、壁を扱うこととなる。

3. 幻想を捨てて、新たな幻想性を目指す——日常性を透かしてそのむこうにどれだけの幻想性を打ち立てられるか。

前記のようにそれ自身日常性そのものであり、表現を目指す何ものとも無関係な住宅に、それを設計することの意味があるとするなら、それは日常性にみられる様々

な幻想といえる事柄、例えば、利便性・機能性の価値、表層によって差異感を感じる価値観等を超えて、ものとしての事実、つまり光と陰・面・線のスケールと、それ等を構成する材質を含めた、相互の関係性という事実、それをいかに構成するか、という一点によって作られる新たな幻想性にしか私はその価値を見いだすことができない。それは人・社会、は変るということを根底としており、にもかかわらず、その変ってゆく時間に耐える、空間の事実とは、そのようなものの関係性の内にしかないと考えるからである。

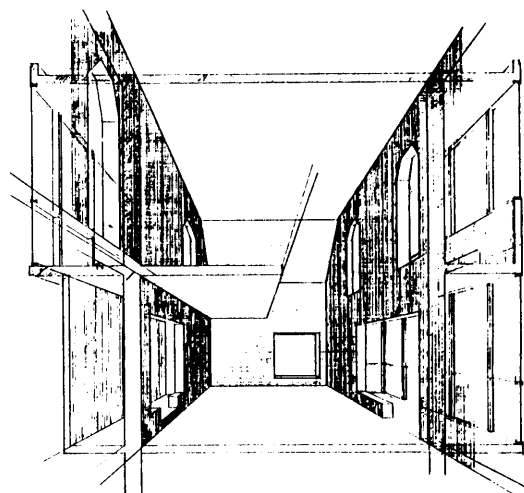
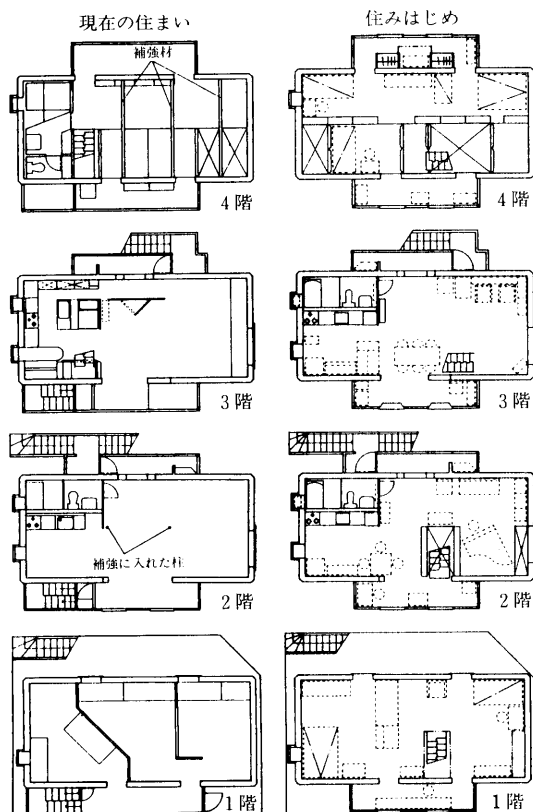
私はかつてあるアンケート『あなたにとって住宅とは何か?』との問いに対して、住宅とは、光の入る地下、囲われた外部を持つ地上、浮遊感に満ちた空中、天とのみ結ぶ天上の、それら四つの空間を積み重ねた塔のようなもので、その中を季節によって移動する裸の生活をするような場でありたい。つまりそれは住居であり、空間の森のようなものだ。ということを書いた。住居という場とは先にも書いたように、住まいという人生の総合的な容器として長い時間に耐える、機能変化から自律し、限りない生の営みを受入れる時間の容器であるとすれば、それは当然宇宙的空間のマイクロコスモスのモザイクでなければならない。その意味にとって、前記4種類の空間の原型は、住宅という機能を超えた全空間のモデルとしてある。

4. 場所性

建築は当然のことながらクライアントの要請により全てが始まる。そして建てられるべき建築を取り巻く大きな意味での環境、そして依頼を受けた作家により構想された空間、という、三つの要素の関係の内に建築を捉えてきた。この機能・環境・空間の三つの関係は、それ等が完全に一致する予定調和というべきものは有り得ないものとして考えてきた。つまり三つの要素は互いにズレた関係にあり、それぞれの一部が重り合ったものと考えられる。そして先に記した建てられるべき建築、空間とは、一度構想された空間は、その有り得べき望ましい姿があり、それは一人の構想するものにとっては、その場所に固有のものであって、独立した人格のように、自律的に在らしめるものと考えてきた。要請の根拠たるクライアントの存在も空間にとって、先の環境の内にある。このような意味において、建てられるべきと言いかつまたその場所に固有の、という意味を見いだすことが、場所性に根差す建築ということである。

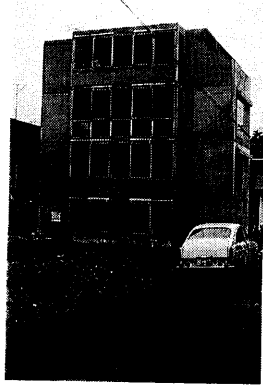
このようにして、住宅の設計は、住居という場の設計であり、自律的な関係、幻想性、場所性、そして空間の原型というテーマが私には考えられる。そしてそれ等四つの主題の基に、住宅はその建てるべき人、敷地の固有の条件を通じて場を形成するための限りなく多様なテーマを発見される。

5. 自律的に構成されたコンクリート壁の箱と生活の関係 —都市の独立住宅のプロトタイプを目指す(北嶺町の家)

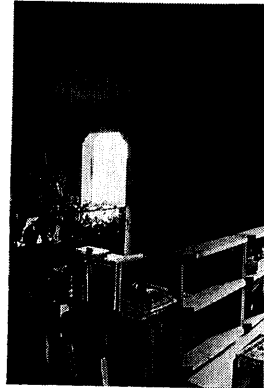


コンクリートによる空間の原型

図-1 北嶺町の家：東京大田区、敷地面積71.92㎡、延床面積162㎡、竣工1970



外観



内部空間

写真：北嶺町の家

1970年に完成した自邸である。当初は4階建ての上下2層ずつを2家族で使い分けるミニ共同住宅として構想された。極めて限定された敷地面積、超低予算、超短期設計という中で、若い設計者が条件はともかく、作品としていかなる意味を持ったものとするができるかを問われる仕事であった。それは住まいの設えをほとんど全て割愛し、躯体のみともいえる、目指す空間の原型のままに在るというものであった。空間の骨格のみが構想され選ばれ決定されたもので、それ以外の住むための設えの全ては、最少限の許される範囲で、実現することのみが目指され、いわゆるデザイン的考慮の対象としては、限りなくアノニマスな表現で安価で普通であることのみであった。具体的には'70年当時の都市に対する個の空間の確保という強い意識と、前述の壁の空間のもたらす個感覚の覚醒という目的から、厚いコンクリート壁構造の空間を軸に、その内部空間の感覚を明確にする意味で、壁の断面をできるだけそのままに表すこととしている。そのように断面を自由にされた壁の空間に、2重に囲われた場と感じられるための方法として、その外部に単純なガラスの箱が取付けられている。つまり極めて限定された空間であるだけに（壁1枚で街路に接する）安心感、保護感の確かな場として、壁の意識、その断面を見せる開口、それらを自由にする外皮という関係が作られた。プランニングは、動かし難い設備が配置された場所が固定されて、それ以外の機能的対応は、場としての空間に家族が適宜道具を工夫して対応しているというものであった。従って当然のことながら全ては1室の連続した空間で、機能分化された部屋というものは、扉の付いた浴室、便所のスペースのみである。つまり場の在り方のみが決定され、それ以外はルーズで決めないことが意図されている。

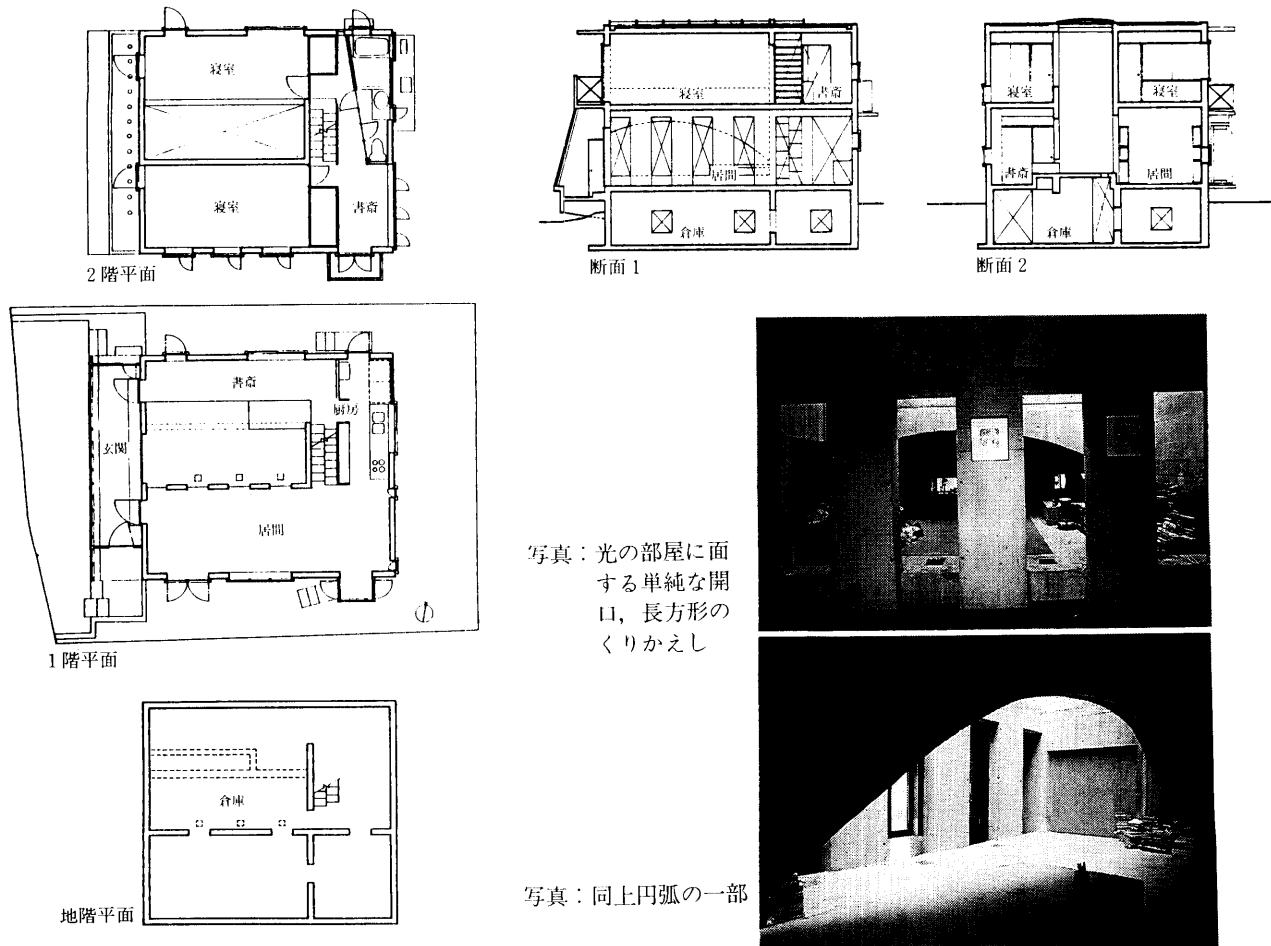
そのようにして設定された4層の空間が、偶然の機会に4層を一体に単独家族が使用することになった。階の違いと設備の配置によってのみ空間を分節されたコンクリートの箱は、その決められていない設えを好都合に、

都市の独立住宅の典型を示すこととなった。それは子のスペースの確保と同時に子のスペースの外への開かれ方の選択の自由を持つこと、独立した外との接点のスペースの設定とそこから内に確保されて在る家族のスペース。そして親のスペースの存在という四つの場がその設えをルーズなままに在るというものである。このような場に対するそれぞれの機能の想定及び外との結び付き方は、立体的な構成を前提とした都市に住まう一つのシステムとなり得ると考える。つまり長い時間に耐えて、家族の変化、生活の内容の変化にその時々柔軟に対応し続ける場の在り方と成るのではないか。事実子供を育て、その独立を見て、一時は一部を第3者用住居とした時期を過ごし、今度は家族の1員が再びそのユニットに独立した生活を営むというような、人の営みの極めて多様な局面に、対応し続けて、25年を過ぎて来た。そしてそれは場を作る空間とルーズな設えという関係は建設当初のままであり、2世帯の共同住宅を前記のような一種の普遍的都市の独立住宅の構造に変えたものは図示の1本の階段と1枚のドアの設置によって決められている。

建物の奥に付け加えられた階段は4層を結ぶと共に、外部へのもう一つの出入口（1階）とも通じている。結果建物は4階以外の各階3か所に出入口を持つこととなった。2階は建物の主入口として使われると同時に、そこは奥の階段とドア1枚で切離されることで、設備を完備した独立のユニットとなることから、何時でも建物を2世帯に分割し得る要素となり、建物の外に対する接点のホールであると共に開かれた場として2重の性格を持つこととなった。また1階の子のスペースは2階の家族共通の主入口を使い、奥の階段で全体のスペースと結ばれているが、同時に直接外部とも結ばれる出入口を持ち、外との関係に選択性がある。このように二つのスペースは選択的に外部との関係を持つことができること、つまり前記のように都市の小さな住戸ユニットであると同時に、独立して外に開かれるスペースユニットを入れ子の状態に備え、子のスペースは家族との結び付を独立か附属かの選択性を持つこと、そして小さな土地での立体的構成にならざるを得ないことに対して、バリアフリーな機能を備えることで建物は単純な4層構成でありながら、各層の複雑な組合せを可能とし、生活という長い時間の変化の状況に柔軟に対応し続ける一種の普遍的住戸ユニットとなり得ると考える。

そして、このような形式を持つ住戸ユニットは、単に独立住宅としてだけではなく、集合住宅を構成するユニットとなり得ることを、ミニマムながら共同住宅を出発点としてこの住居が成立して来た過程が証明しているように思う。 n LDKの効率的集合という常套化した住戸集合形式から逃れる契機となるのが、入れ子状に組込まれた住戸内住戸ユニットの存在ではないかと考える。

6. 日常性をこえてそのむこうに新たな幻想性を見いだす——遺構の如き原型の空間を示す住居（北鳥山の家）



写真：光の部屋に面する単純な開口，長方形のくりかえし

写真：同上円弧の一部

図-2 北鳥山の家：東京世田谷区，敷地面積162.52㎡，延床面積178.32㎡，竣工1980

東京郊外のかつてほとんど畑に占められていた地域の中に、切売りされた小型の住宅地群が散在している。それらは同様に郊外の大規模開発された新興住宅地とも違い、敷地規模が平均的単位であることによる均一性を感じるものの、そこに建築される住宅の雑然とした構えの中に独特の自由さ、明るさともいえるものを感じる。この計画はそのような風景の中にある独立住宅である。都市の住宅はほとんど常に、敷地の法規上の制約をクリアし周囲の環境に対する配慮を重ねれば、それだけで建築の外部が決ってしまうような状況にある。この計画もその例にもれず、三つのエレベーションは、もっぱら住宅の必要に応じた結果となっており、道路に面するファサードが唯一残された建築的伝達のための対象となっている。

内部空間は基本的に3層構成である。中心に全天井をガラスに覆われた光の部屋を置き、1階は生活の主階であるが、そこは光の部屋に面する壁に、いくつかの開口を設けて、壁の断面を表し、その存在感を明かにしている。開口の形式は長方形と大きな円弧の一部といった単純図形であって、作者固有の独自性を意図されていない。但し同一形式の繰り返しや大きさの意図的な操作、図形の一部の切取りにより全体への暗示、連想の示唆により、実体としての光の部屋のスケール感とは錯綜したものとす

ることが意図されている。2階は全天の光の中に全く単純な1枚の壁を感じる空間として在る。これらに対して半地下階は、上階の光に満ちた空間を主軸とするものに対して、全くの微光によって壁の断面としての開口のみが照らし出されている。それは空間のスケールの実体を全く表さない空間としている。つまり上階とは別のもう一つの世界を作り出している。明確な3層構成の光の様態を作り出すことによって、この住宅のスケール感を個々において単一なものでありながら全体として複合的なものを感じられることが意図されている。ファサードを形成する傾いた壁は、薄暗がりの中で、入口ホールの空間が、この建物自身の外部を含めた周囲の雑然とした日常性の中から建築内部の独自の世界に至る導入部を形成するための手段となっている。

光の中で壁の断面をそのまま生活の中心に表した空間は、建築の遺構のようで、住まう人達はあたくも昔からそこに在った何かの構築物に気儘な工夫をして住まっているようで、その住まいぶりの自由で、こだわりのない表情と建築の原型ともいべき空間とのコントラストは、あざやかに相互を際立たせて、そこでは建築も人も極めて自律している。

7. 記憶の再構築という幻想性（東船橋の家）

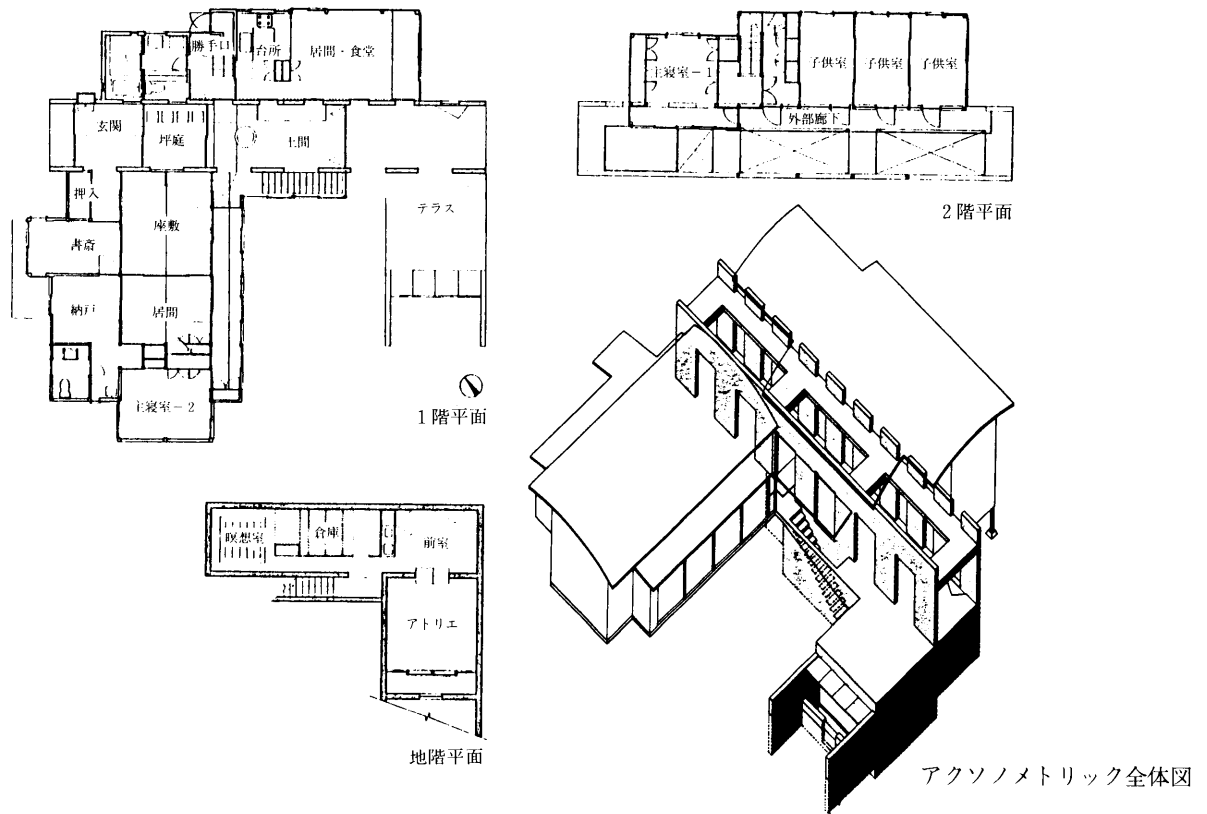


図-3 東船橋の家：船橋市，敷地面積471.55㎡，延床面積256.11㎡，竣工1989

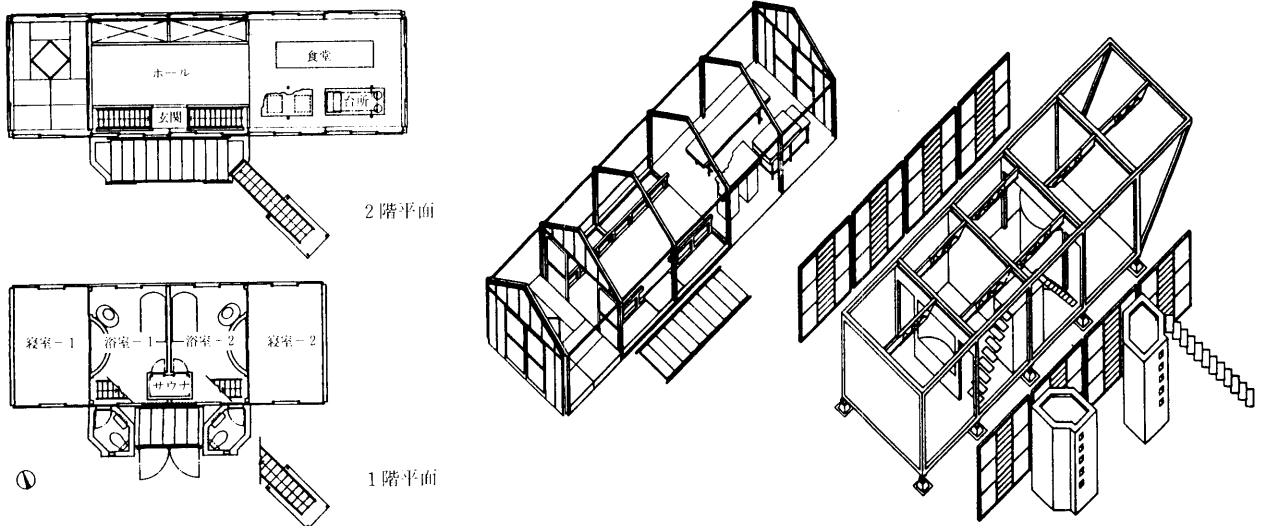
かつて住み慣れた我が物としていた空間を，そのまま再現することではない，空間の継承ということがあると考える。その生きられた空間の意味の継続する空間，あるいはかつての空間の曖昧な連想による既視感に根ざす再構築された記憶の空間。それは当り前に受止められていた日常的で，かつ新しく出会った空間に，突然に浮び上がる時間の意識であり，生の営みの視覚化，生きられた家の歴史の視覚化といえる幻想の空間をもたらすものとなる。

この計画は船橋市郊外の砂丘の中につくられた小集団の住宅地にある。3世代にわたる7人家族という今では大家族というべき一家である。親世代と子世代の独立した生活領域を持つと同時に大家族が一堂に会する時間を楽しめるプランニングが求められた。また子世代の当主の画家でありイラストレーターである職業に対応するアトリエが要望されており，住まいと一体でありながら，かつ独立した領域を確保することが求められた。依頼者の一家は，計画地から少し離れた所に，30年以上にわたって居住し，そのかつての住まいも30年来の古い姿を残して，一見普通の家に見えながらこの地に独特なものと思わせるエレメントにあふれていた。周囲は海に近い（今は埋立によって海ははるか遠のいてしまった）かつての東京からの別荘地の風景を偲ばせる家がわずかながら残っていた。高い天井の木造家屋，広い土間に置かれ

た大テーブルの食事室と台所の連続した空間，手すりの付いた腰掛け窓，広い屋根付きの見晴台のような物干し台，深い軒の下にある縁側に面した二間続きの座敷，倉と井戸，砂地と松の木などが，いずれも海に近いその辺りの空気とよく似合った空間を作っていた。

計画はそのような長い年月慣れ親しんだものを構成のエレメントとして，それ等の構成の新しい関係性だけが設計されたものとして組立てられている。だがその記憶の家のエレメントは，形の再現ではなく，その存在だけが引継がれて，実体は全てが新しい空間であり，既視感によって構成された新たな家というべきものである。そしてそれらの記憶の家と全く無関係に地下のアトリエがあり，両者に共通する要素は，海の気配を感じることに，風・光・土・水の自然の要素が取上げられて，各々の空間において，それを意識する共通の空間感覚によって結ばれている。つまり，旧世代と新世代が共通の記憶の要素を持ちながら，新しい空間に対して各々独自のイメージの空間を読み取って，自分の居場所と見だしていけるようなものとしたと考えた。いずれの世代にとっても，日常性の中に埋没した記憶の要素を，それと意識して見た瞬間に突然に立現れる，幻想の家として構想され，そのことによって時間を内包する空間として現れたいと考えた。

8. 禁欲的なヘビーデューティの追求と、愉快的な空間の受容を同時に満足させる^{注1)}——ウィークエンドハウスのな合宿所を可能な限り既成品の構成部材の集積によって作る (御殿場のガラス小屋)



写真：2階温室部分 (撮影新建築写真部)



写真：同左カーテンを引いたところ (撮影新建築写真部)



図-4 御殿場のガラス小屋：御殿場市，敷地面積701.20㎡，延床面積96.62㎡，竣工1989

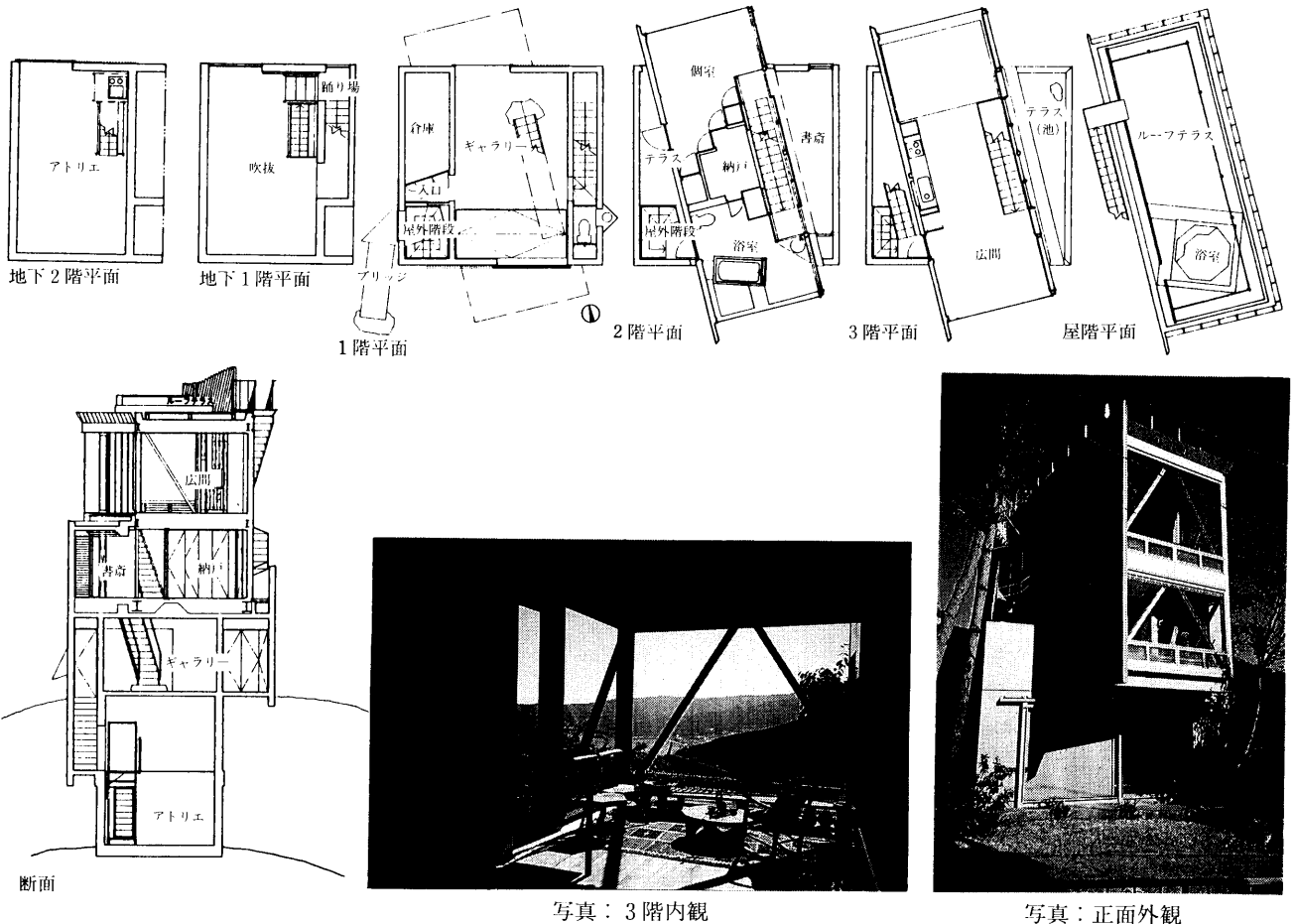
作家の固有の造形を創り出すこと、材料の表層の差異を求めること、機能的要請の利便性を求めること等一切の幻想を捨てて、新たな幻想性をつくることを目指して、構成する空間の関係性にのみ着目する。それがこの計画の全てである。

極く当り前の農業用既成品温室を用いること、その他は全て建築用仮設資材の組合せによって構成された空間である。独立基礎上の仮設支保工用ジャッキ、床を構成するエキスパンドメタル足場床、同様の組立階段、安全ネットを貼ったソファ、厨房機器は全て業務用既成品の組合せ、戸棚を支える足場パイプ、というように安価で普通な変哲もない製品の組合せというように、その構成方法にのみ作意があり、それを作り出すものは作者の造形とは無縁なものとなっている。それ等構成部材には全て装飾的要素は有るべくもない、目の悦楽としての美しさとは一切無関係な工業製品のひとつであり、全ては金属またはガラスといった不燃物でもある。そのような全く透明化された物としての事実のみが明かにされた空間で、プランニングとしては、一対の男女の部屋が左右に有り、浴室も全くシンメトリーに各々のために一対のものとしてある。あとは厨房と一体となった食事室、ホー

ルのような空間とそれに続く酔っぱらいのためのこたつ部屋があるという明解で単純なものである。透明なガラス小屋の内部は全て白い布1枚によって外からの視点をコントロールされているにすぎない。つまり従来の計画において壁とされていたもののほとんど全てを透明化され、外部との関係も明かな対峙の関係となっている。ここでは関わる人は、人そのものとして自然を前にしてあり、人と人の関係もまた、家族・夫婦・グループ等という関係を離れて、個人として対峙している。

自然の中に開放された、男女の明らさまな対峙、明るく透明な遊び場の華やかな気分、かろうじて視覚的プライバシーを守られ、音、気配の自由な伝達と、そこに裸の男女が居るという意識の艶やかさ、それ等のものが前述の極めて無機的なものの中に在って、自然の色濃い緑の中に浮遊する様は、自由と共に人間の本来的な意味でのエロティシズム(生命感ともいべきもの)を感じさせると考える。そのような空間、つまり現実の空間の変哲もない日常の中に突然に意識される特異な空間意識、それを作り出す幻想(思い込み)を排した関係性のみにによって組立てられる空間を、既成品という解り易い構成材によって表すことを考えた。

9. 場所性の建築——熱海のアトリエ住居



図一五 熱海のアトリエ住居：熱海市，敷地面積627.98㎡，延床面積172.35㎡，竣工1993

場所性の建築とは、既にそこに在る文脈をそこに建てられるべき建築の発見によって目に見えるものとする^{注2)}。

この計画は、熱海市郊外に分譲別荘地内にある、厳しい北斜面の一角に建てられたある造形作家と美術研究家のためのアトリエ付住宅である。

そこは明らかに、1本の塔を建てるために、クライアントによって選ばれた場所であると感じられた。宅地として著しくそれにふさわしい要件を欠いていたが、周辺の風景のスケール感のダイナミズムと、展開する景観の要素の豊かさは、四季を通じて、あるいは1日の時間の経過の中で、極めて変化に富んだ素晴らしいものであると思われた。ここには場所的な自然の様相に関わる極めて多様な展開と、宇宙的スケールの時間の流れを体感するに相応しい光の変化の様相の全てが見て取れる場を感じるものがあつた。それは、作家の生の営みの全時間を受止める場を作るに最適な場所であり、自らの場を定めることによってこの場所のそうした意味を顕現するものと思われた。

敷地へのアプローチ道路は、勾配の上側にあり、そこからはほとんど土地の様子をうかがうことができない程の北下りの急勾配地である。正面の北側は、谷を隔てて

美しい緑に覆われた斜面に対しての。その斜面に連続する北西側は分譲地に無数の別荘がこちらをうかがうように建てられた巨大な急斜面となっている。一方南側は、アプローチ道路を境に、やはり急斜面が下って、遠く熱海湾、大島の島影、網代湾などを望み、穏やかな伊豆の山々の風景へと続くパノラマが展開している。このように周辺の極めて恵まれた景観にもかかわらず、あまりの急斜面であるために、利用し難い状況で、長年にわたって見捨てられた宅地としてあつたものである。このようなバランスを欠いた負の条件を、1本の塔を建てることで、この土地のもつ正のダイナミズムを一気に、そして最大限に現前させるものとする事ができると考えた。

そしてこの1本の塔には三つの主題を表すことが^{もくろ}目論まれている。

第1は、クライアントである造形作家の石と金属の複合された作品への連想から導びかれた、その変様態としての塔であること。建物は様々な部分に作家自らの手によって作られた部分がありそれは作家独自の想像力によって建築の一部として付加えられたものとなっている。建物自体の空間への作家の関与の仕方が作家の作品と混成的な関係にあり、その実体もまた同様な関係を持つという、入れ子状況を作り出している。今後建物は住まわ

れることによってさらなる変貌を加えられて、「建築」「造形」「生活」のせめぎ合いがそのまま空間を作り出してゆくものとなり、三者の自律的併存が、相対的に各々の見え方の純粹化を保証し、その時塔は、ランドスケープというスケールの中で、1本の巨大な彫刻のごとき在り方をすることができるのではないかと考えた。

第2は、作家の日常生活と、アトリエ作業、つまり日常と非日常の時間が、ここでは一体でありながらかつ際立って対比的なものとしてあることを感じ表現するものとするのを考えた。斜面に根を降すように据えられた基壇としてのコンクリート壁の空間は、強い内部への指向性を持って、切り取られた間近の自然の姿をより鮮明に感じさせる。その上に積み重ねられた鉄骨フレームとガラスの空間は、浮遊感に溢れ、解放的で明るさに満ちている。ここで光は下階のその強いコントラストをもった明暗ではなく、紙を透過して柔らかく空間に満ちていくようなものとなっている。

第3には、私が常に住まいの空間に「場」として備えたいと思う「光を導かれた地下」「囲われた外をもつ地上」「浮遊する空中」「天と結ぶ空間」という四つの空間的要素の原型を体現する塔として考えられた。塔の中間部において、開口部によって前庭と一体的につながられ、水平に外部と連続する地上のギャラリー、その開口部のディテールは壁の断面がそのまま露出する納りとなり、ガラス板だけがあたかも外側に貼付けられたかのような内観となって、外部に直接連続しているかのような空間感覚である。地下の奈落に下りるかのようなアプローチ階段によって、深い地下に下りながら、実際は斜面の下部に至り、間近に迫る樹木、土と相対するアトリエの空間。これらの2層の空間は、コンクリート壁の空間として、意識を内に向わせるものとなっている。一方地上のギャラリーから書斎を経て入る寝室及びその上の3階に至ると、そこは鉄骨とガラスによって構成された空中の空間であり、斜面の上に大きく張り出して、浮遊感に満ちている。また、透明化によってもたらされる内部空間とスケールのある外部空間との一体感は、この浮遊感によって際立ったものとなる。そしてこの解放感に満ちた空間の屋上は、完全に空に解放された頂上の空間で、ダイナミックに変化する丘の稜線と、海の広がり、深い谷の緑と対面する場である。ここは塔の側面に付けられた1枚の金属の壁による背と、作家自らの手による流木のオブジェによって、背後の別荘群からの視線を避けた、完全に個人的な空間であることで、より自然との対峙が実感される場となると考える。

このように、四つの空間要素の積層として考えられた塔は、様々に変化する光の受容体である。逆光による南の風景と明るく照らされた北の風景が、地上の空間を水平に貫き、高い南からの光が垂直に空間を降りて、谷へ

下っていく地下の空間。南のガラスを透過した風景は、北のガラス面に広がる数百メートル前方の風景の中に映り込み、明暗の推移と共に虚実の重層の様子も入れ替りつつ幻想の風景を生み出し続ける空中のガラス箱のような空間。満天の星の下に、シルエットとなった夜のパノラマ風景が時々刻々と色を変えて、宇宙の運行を目の当りにする空間がここにはある。それは光の変化、つまり時間を空間化し目に明らかにすることであると考え。クライアントの選んだこの地に、彼との協働によって混成的な1本の塔を建て、この地のランドスケープの意味を顕在化することは、小さな建築たるこの住いを、宇宙的なものに向って拡大していくことであり、それは作家の生きる全時間のための容器としてふさわしいものとなるのではないかと考えた。

10. 住居の場の拡大

様々に機能分化を限りなく続けてきた近代の空間にあって、住宅とはそのスケールの小ささ故に、そこでの限りなく多様で多岐にわたる営みの質からも、最も始源的で機能分化され難くある空間として考えられるべきものと思う。現代の生活は、一言に集約するならば、全ては幻想というべき状況にあり、実体、本質というコンセプトに最も遠い都市生活に支配されているという認識は、電子メディアのもたらすものによって最大限に加速されて、いまや日常化されている。あらゆるメディアの五感を通じての電子的なるものの浸透は、全てをヴァーチャルなもの、あるいはその錯覚ともいうべき感覚、とする状況が作り出されている。そうであれば、住まいの空間は、先にも述べたように、限りなく機能分化を避けた、多義的な場の形成と、その多様な場の相互の関係性という事実こそが実体であり、それらの構成力の持続とテーマの発見——光の変容体として表され、生きられる全ての時間を引受ける空間、スケールに代表される事実としてのものの関係性にのみ着目する空間、その場所の性格、意味を顕現するものとして発見されるその場所にしかない空間、そして四つの空間の原型を備えること——こそが住宅の場の拡大——住居の設計——となると考える。

<注>

- 1) 植田実：「室伏次郎の仕事プレイバック」建築文化、1992.3
- 2) クリスチャン・ノベルグ・シュルツ：「ゲニウス・ロキ」加藤邦男他訳、住まいの図書館出版局

<参考文献>

- 1) クリスチャン・ノベルグ・シュルツ：「実存・空間・建築」加藤邦男訳、鹿島出版。
- 2) クリスチャン・ノベルグ・シュルツ：「住まいのコンセプト」川向正人訳、鹿島出版。
- 3) ホットー・フリードリッヒ・ボルノウ：「人間と空間」大塚恵一、池川健司、中村治平訳、セリカ書房。